

# スターライトパレード

酒井恵三

「SEND AI 光のページェント」は日本のクリスマスイルミネーションの先駆とされていて、その規模も全国最大級とされている。LEDが一般化した際も、一早くそれを取り入れ、あらゆる意味で先駆と言えるのではないか。

早朝の飛行機で小松空港から仙台入りし、仙台港近くの水族館やアウトレットモールで過ごした私は、午後五時半の光のページェントの点灯まで中心街を買い物したりしていた。仙台の町は震災後、様々な意味で変貌を遂げているが、それを肌を通して感じるのは楽しかった。そう言えば、三・一一の際、仙台港近くの倉庫に保管されていた光のページェント用のLEDライトが、津波の為使い物にならなくなり、その年の光のページェントの開催が危ぶまれた事を思い出していた。実際LEDの灯りは、消費電力が白熱灯に比較すると小さい上に柔らかく、見る者の心に沁み渡って行く様な気がする。仙台の繁華街、東一番丁や国分町の通りから会場になっている定禅寺通りに向かって、大勢の人々が光のページェントの点灯前から歩いており、私はその人波に圧倒され続けていた。警察の警備も厳重で、定禅寺通りでの野外ピアノ演奏等、光のページェントに付随したミニイベントが行われている中を私は歩いて行った。

そうこうしている内にも、五時半の点灯を迎えた。樹々の下から光のページェントの点灯を見上げていた私は、その余りの迫力に思わず息を飲んでた。人々の中からも歓声とも、ため息ともつかぬ声が挙がり、見ず知らずの人々と美を共有するのは、幸福な事なのだと感じていた。

日本を代表するバンドの一つ、SEKAI NO OWARI (セカイ・ノ・オワリ、略称セカオワ)の代表曲に「スターライトパレード」と言う名曲があるが、私は光のページェントの点灯を見ながら、その歌詞を思い起こしていた。セカオワはこの歌の中で星空の美しさを賛美し続け、聞く者にラブソングの様な甘美な思いを抱かせるが、最後の歌詞「それはまるで僕たちの文明が奪った 夜空の光の様に」で強烈な文明批評を提起している。初めてこの歌を聞くと、その最後の歌詞に戸惑い、(ノックアウトされる、と言った方が良いかも知れない。現に私がそうだった。)ネガティブな気分にはせられたものだった。大体セカイ・ノ・オワリと言うバンド名自体そうなのだが、セカオワの曲は全般的に根底にはネガティブな世界観が流れており、「スターライトパレード」の歌の中でも、文明の

発達が夜の星空等、犠牲にしたもの、追放したものが多いと言う意味の事が歌われてはいらぬ。しかし文明や人智の発達は、他方ではこの地上に星空を作り出したのではないかと私は思っていた。

イルミネーションと言う、人工の星が降る眠らない夜に私は人混みを掻き分け。定禅寺通りを歩き続けた。せんだいメディアテークの前衛的な建物の中に入った私は、最上階(七階)から光のページェントの全体像を視覚的に捉えようと考えた。建築家伊東豊雄氏の代表作の一つと目されているこの建物は、その特殊な構造故、仙台の建築物の中でも特に目を引くが、真にその価値が証明されたと言えるのは、実は三・一一だったと言える。三・一一の巨大な破壊力をもってしても、メディアテークは崩壊しなかったのだ。明るさと透明性を強調した全面ガラス張りのこの建物は、通りからほぼすべてが透けて見える。私は仙台が、東京や大阪以上の近代都市(と言うより前衛都市と言うべきものかも知れない)であり、日本の都市の中でも京都や金沢と言った古都とは対極に位置するのではないかと考えているが、その象徴と言うべき建築物がメディアテークだった。

メディアテークの七階から見ると光のページェントは、文字通り地上の星々だった。六時を迎える時に、スターライト・ウイंकと言って全ての明かりが約一分間消灯した後、一斉に再点灯する訳だが、その点灯の瞬間、周囲から歓声が上がった。私が美人がこちらに振り向き様、ウイंकする様な、そんな衝撃を覚えていた。

イルミネーションの起源は十六世紀にまでさかのぼり、宗教改革で知られるドイツのマルティン・ルターが考えたとされている。彼は夜、森の中で煌めく星を見て感動し、木の枝に多くのロウソクを飾ることでその景色を再現しようとしたと言う。そう考えると、光のページェントもメディアテークも時代の最先鋭から生まれた美の発露であり、自然と言う偉大な教科書から人間が多くを学んで生まれた芸術作品と言えるのではないか。LEDの柔らかな灯りの中で、私は伝統に固執するだけでは殆んど何も生まれず、大胆に現状に挑戦する事で生まれる物が実に多いと言う事、単に芸術活動だけでなく、恐らく人類のあらゆる領域の活動に於いてそうなのではないかと思ひ始めていた。美を感じて我々が美から教えられる事は、実は想像以上にあらゆるシーンに応用出来るものなのかも知れない。LEDの灯りと言う、人工の星が降る眠らない仙台の夜に、私はそうした事を思いながら光のトンネルの中を歩いていった。